国立大学法人
大阪教育大学

附属高等学校池田校舎　髙市　佳名子

古典において探究的学習を通して基礎的学力の充実を図る試み

要旨

探究的な古典学習を行うことが求められている。古典を読解する力を付け、かつ、探究的な学習を行うにはどうすればよいか。古典を「嫌い」と言う初学者にとっては、視覚教材や、QFTの手法を用いた学習に一定の効果がある。しかし、それだけでは読む力はつかない。次の段階として、現代語訳ができることを重視するよりも、授業者が作成する「問い」に取り組みながら読解をすすめることで、学習者は探究的に古典教材を読むのであり、自分や社会と結び付けて考えることなる。こうした2つの過程による探究的学習により、学習者は「読めた」という実感を得ることができた。また、それだけではなく、実際に読解する力もついたという結果を得た。

1. 背景／目的

平成30年告示「高等学校学習指導要領解説国語編」では、高校古典の課題の一つとして「社会や自分との関わりの中でそれらを生かしてくという観点が弱く,学習意欲が高まらないこと」を指摘する。その解決として、科目構成を改善し、「古典探究」において、「古典を主体的に読み深めることを通して,自分と自分を取り巻く社会にとっても古典の意義や価値について探究する」ことを要求する。また、「『古典探究』以外の選択科目においても、高等学校で学ぶ国語の科目として探究的な学びの要素を含むものとする」とある。（文科省,2018）

このような課題の指摘はもっともであるが、ここにきて教育現場には数多の混乱がある。そのうち、次の２点にフォーカスを当てたい。

課題①すぐには変革しない大学受験を目の前にする生徒の中には、探究的な学びよりも、受験対策としてのいわゆる詰め込み式の古典知識を求める者がいること。
課題②「探究的」という言葉が具体的に何を示しているのか、現場の教員にイメージが湧いていないこと。

もちろん、授業の中に特別な言語活動を入れれば、「探究的」な学習は容易となるだろう。しかし、それが古典の基礎的知識の定着と乖離したものであるならば、学習者のニーズからは外れていくのであり、新学習指導要領において、そのような時間は確保するのが難しい。この実践の目的は、探究的要素を取り入れながら、古典の基礎的知識の習得をめざす所にある。

2. 方法と過程

①対象：附属高校池田校舎66期生160名
②期間：第１学年～第２学年（2021～2022年度）
③科目：第１学年：国語総合（古文）、第２学年：古典（古典には古文と漢文を含む）
④方法

【過程１】第１学年
⑴古典に対する意識調査を実施。
⑵視覚教材とＱＦＴ(The Question Formulation Technique)を用いた探究的学習の実践
①Ａ～Ｄ４つに分かれた『伊勢物語絵巻』「東下り」の部分を見て、４人班で問いを作る。「大切な問い」を絞る。（Googleスプレッドシートを活用）
②絵巻Ａ～Ｄをストーリーの順序で並べ替える。（班代表者による口頭発表にて確認）
③現代語訳を作っていく読解の授業後、自分で設定した「問い」に答える。（Googleドキュメントの「ミニレポート」に記入して提出）

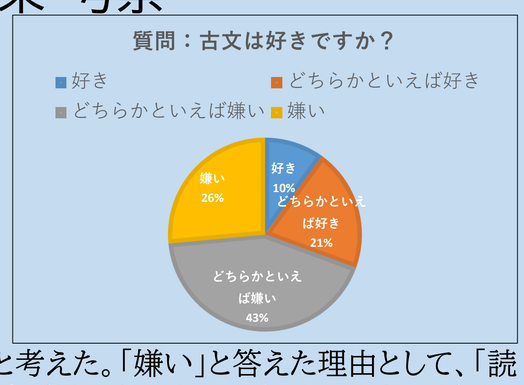
⑶定期考査や行動の観察による効果測定。

【過程２】第２学年
⑴「自力で読む」を目標においた読解を繰り返し実践。
①当該の単元で学びたい古典常識および文法事項を確認する。
②３～４人班となり、古典の文章読解を、授業者が設定した問いを通して取り組む。現代語訳は配布し、行き詰ったら見てもよいとした。
③班の代表が、口頭や板書によって根拠とともに発表することで、全体で確認。
④部分的な逐語訳を行う。
④ミニレポート（個人）を記入して提出する。読み比べ教材があればここで行った。
⑵定期考査や行動の観察、授業アンケートによる効果測定を実施。

3. 結果・考察

⑴入学当初の古文に対する意識

右のグラフは、2021年度4月に1年生160名を対象に行った古文に対する意識調査の結果である。古文が好きな生徒は31%であるのに対し、嫌いな生徒は、69%と約7割にのぼった。



「古典に親しむ」ことをめざすのであれば、「古典が嫌い」と即答してしまう学習者をいかに減らすかが急務と考えた。「嫌い」と答えた理由として、「読めないから」「わからないから」「やる意味が見いだせないから」というものが目立った。

⑵視覚教材とQFTを組み合わせた実践

「読めない」「わからない」という心情にアプローチする手法として、視覚教材とQFT(The Question Formulation Technique)の手法を組み合わせる実践を行った。自ら立てた問いに答えることができれば、「わかった」という達成感を得られると考えた。ミニレポートの記述や、行動の観察から、興味や関心の高まりと、ある程度の読解の深まりが見られた。

⑶第1学年で残った課題

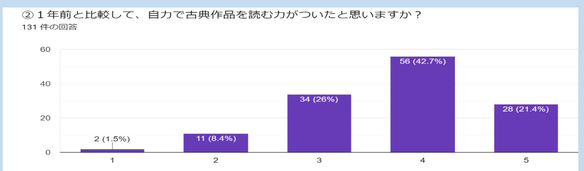
一定の効果はあったものの、課題も残った。次の2点だ。①学習者が設定した「問い」は古典の読解の深まりとして、必ずしも効果的な問いであるとは限らないこと。②学習者と授業者がやり取りしながらであっても、現代語訳をしてから内容を確認する授業においては、初めて見る文章を「自力で読む」力を付けにくいこと。

⑷第2学年での実践-「自力で読む」-の結果

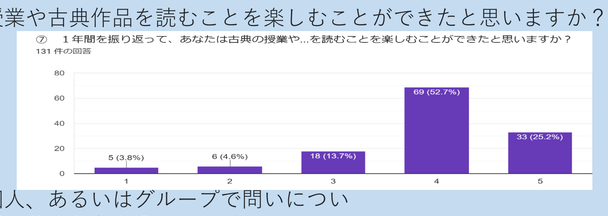
第2学年では、授業者の講義を聞いたり、現代語訳したりする前に、問いに取り組むことに主眼を置いた。学習者が大学入試を一つの目標に置いている限り、初読の文章を読解する力は不可欠だからだ。

読解に有効な問いを設定するために、今度は授業者が問いを設定した。また、予習にせず、教室内で十分に読む時間を設けた(大村,1997)。次の結果は、2022年度2月に行ったアンケート結果だ。

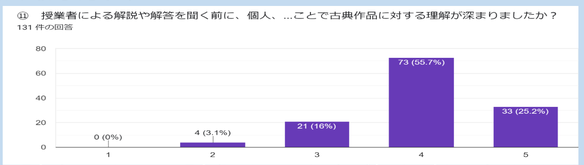
▼１年前と比較して、自力で古典作品を読む力がついたと思いますか？
肯定的意見の理由：これまで、初読の問題などはほとんど自分で内容を理解出来なかったが、たくさん文章を読むことで、**読み方が分かってきたように思う**から。／できるだけネットを見ずに**ゆっくり自分で考えるようにできた**から。



▼１年間を振り返って、あなたは古典の授業や古典作品を読むことを楽しむことができたと思いますか？
肯定的意見の理由：グループで話し合いながら読み進めていったから。／現代の**価値観との絶妙な違いと共通点が興味を引いた**から。／**読めた感覚が楽しかった。**



▼授業者による解説や解答を聞く前に、個人、あるいはグループで問いについて考えることで古典作品に対する理解が深まりましたか？
肯定的意見の理由：事前に考えて解説を聞いたことで、**わかっていた部分とわかっていなかった部分を知ることができた**／結果的に間違っていても、それぞれの思う解釈を聴くことで**色々な視点から文をみることができた**から。



このように、答えを「探究」しながら読むことで、読解という行為を楽しむとともに、学習者が「読めるようになった」という実感を持つことができたとわかる。

⑸定期考査における初読の文章の得点率の推移

１年後期期末考査	２年後期中間考査
48.3%	47.9%

左表は、66期第1学年と第2学年での定期考査における、初読の文章の得点率の推移である。一見、下がったように見える。しかし、2年後期中間考査では、実際の大学入試問題過去問をもとにし、さらに、古文・漢文2種の文章を出題した難易度を上げたものである。その中で0.4ポイントしか下がらなかったのは、「自力で読む力がついた」と言ってよいだろう。

4. 結論・今後の展望

⑴結論

高校古典における探究的な学びとは何か。初学者にとって、文字のみの古典資料は、親しみにくいものだ。その際は、視覚教材やQFTの手法を用いた探究的な学びが有効だ。しかし、それだけでは、読む力はつかない。第2学年においては、現代語訳から入るのではなく、学習者がテクストにこだわって読み進めることができるような問いを、授業者が用意し、「問い」から入ることで、「探究的な学び」が可能だと考える。教室の中で「読む」時間を取ることによって、学習者は「読めた」という感覚を持ち、それが結果的には古典に親しむとともに、基礎的な古典の学力を身につけることにもなる。

また、新学習指導要領は、古典と自分や社会を結び付けることを企図している。「3. 結果と考察」⑷の生徒記述を見れば、古典常識や単語を知り、読み進めていくという過程を辿る事によって、現代の価値観との違いや共通点に学習者は気付き、自然と考えるようになるとわかる。探究的な学びとは、何も特別なことではない。古典学習においては「読み進める」というその思考こそが探究的であり、大切なのは、読み進める結果へとつながるような問いづくりだ。探究的な学びと、実際の大学入試の間で揺れる学習者の困難を少しでも取り除くために本結果を生かしていきたいと考える。

⑵今後の展望

『教えるということ』の中で、大村は、学習者は読む感動を教室で味わわねばならないと言う(大村,1997,p. 41)。大村は、戦後まもない学校で、教材そのものよりも、教材で何を学ぶかを重視した。彼女の授業はまさに探究的な学びと言え、新しい国語の学びに大きな示唆を与えてくれると考える。有効な「問い」の作成において、大村の実践を、現代でも活用可能な指導案にしていくことを今後の課題としたい。

5. 引用・参考文献

文科省『高等学校学習指導要領（平成３０年告示）解説　国語編』（平成30年７月）
ロ湯東京国立博物館「東京国立博物館　研究情報アーカイブス」https://webarchives.tnm.jp/（2022.02. 19最終確認）
ダン・ロススタイン『たった一つを変えるだけ　クラスも教室も自立する「質問づくり」』（2015）新評論
大村はま『新編　教えるということ』（1997）筑摩書房